

### 成長し、聖められつづける生涯

(「テサロニケ四・一〜八」)

七月の都議選でのこと。告示前に次々に離党する議員たちを見た前進黨の松原仁都連会長はこうつぶやいた。「民進党が嫌いだから離党したわけではない。勝つために離党をゆるしてくれと言っているのだ」それから三カ月もたたないうちに彼もまた民進党を離れた。曰く「これは一つのチャンスで、一つの勝負」だそうである。選挙は確かに勝負、戦略だ。しかし目の勝負にこだわり「バスに乗り遅れるな」というのもどうなのかと思ってしまう。閑話休題。パウロは優れた開拓伝道者であり、ソウル・ウイナーであったが、彼はまた「救われれば一丁上がり」ではなく、人々を養い育てた教育者でもあった。目先の結果だけでなく、信徒を生かす成長のプロセスを殊の外大切にしていたということである。今朝は以下キリスト者の成長とということについて二つのことを学びたい。

#### 一、成長しつづけること

一、二章の記述などを見るとテサロ

ニケの教会はその最初から素晴らしい

教会であったことが良くわかる。彼らは

使徒たちの語る正統的な福音を聖霊の

喜びをもって受け入れ、むなししい偶像礼

拝を止めて、生けるまことの神に任せ、

迫害や艱難の中にあつても主の再臨を

待ち望み、希望にあふれて生活をしてい

たのだ。つまり彼らはクリスチャンとし

て模範的な素晴らしい生活をしていた

と言える。しかしパウロはそれで満足し

なかつた。むしろ「ますますそのように

歩んでください」と激励し命令している。

これは大切なことである。というのもこ

うした継続的な進歩や発展と言ふ意識

に欠けると私たちの信仰はすぐに「あの

頃はアツかったなあ」という過去を美化

し、今に不平を言うものになってしまう

からである。それに対して三年ほど前の

朝ドラ、『花子とアン』の中で宣教師の

ブラックバーン校長が卒業式のシーン

で「私と共に年をとりなさい。最上のも

のはなお後に来る」と語るシーンがあつ

たが、これこそ実にキリスト教的である。

開かれた未来、約束された終末を見据え

つつ、今を主と共に、主のために生きる。

その時に人間はイエスご自身が語られ

たぶどうの木のとえ(ヨハネ一五章)

のように成長を続け、結実の人生を生き

ることが出来るのである。成長すること

は神のみこころなのだ。

#### 二、聖めつづけられること

一、二節において総論的に成長を求め

たパウロは三節以降に於いてテサロニケ教

会の信徒にとつて更なる成長が必要なポ

イントを挙げる。それは「聖め」、特に「か

らだと性」に関することである。しかしこ

こを読むとなぜここまでパウロは「性」の

問題にこだわるのかと訝りたくもなるの

だが、テサロニケ教会の状況を考えればパ

ウロのこういう筆致も理解が出来る。テサ

ロニケ教会はマケドニア(ギリシャ北部)

に属しており、会員の多くもギリシャ人であ

つた。ギリシャ人はその神話などを見て

も解るとおりユダヤ人と比べ性道徳は開

放的である。また初代キリスト教に直接

間接の影響を与えたグノーシス主義者た

ちの中には、救いは「霊」に属するものだ

から、「からだ」はどんな放縱や淫蕩な行

いをして問題はないのだと説く者もいた

ようである。このような文化の中にあつた

からこそパウロはきよめ続けられることの

必要性を懇切丁寧に説いたのである。も

う一つ興味深いのはパウロは性の放縱の問題

を単に個人のこととだけ考えるのではな

なく、そうした行いに身をやつすのは主に

ある兄弟姉妹との交わりに破壊的な影響

を与える主張していることである。つま

り聖書の主張する「きよめ」は単に一個

人の問題にとどまるのではなく、その共同

体全体に及ぶ重大事なのである。

\* \* \*

小池新党へ合流が決まり解党状態にな

った民進党だが、死に体にとどめを刺し

たのは「保育園落ちた。日本死ぬ」の山

尾代議士の不倫疑惑だった。それとほぼ

時を同じくして不倫疑惑を報じられたの

が女優の斉藤由貴さん。その週刊誌の見

出しは何と「斉藤由貴、背教のW不倫」

だった。しかしなぜ「背教」なのか。解る

人には解ると思うが彼女は親の代からの

モルモン教徒であり、それを公言しながら

芸能活動を行っていたのもあってそれがネ

タにされたわけである。その後報道は過

熱し、当初疑惑を否定していた彼女もつい

にそれを認めて自らはモルモン教会に除

籍を願ひ出たという。だが地元モルモン

教指導者は「由貴さんの人生のために教

会があるのです」と言つて慰留したという。

私自身はモルモン教をキリスト教の一派

として考えてはいないが、一宗教者として

この対応に学ぶべきところはあるように

思う。罪を認めたものにチャンスを与え、

回復を模索しているように見えるからだ。

人生はプロセス。犯した罪を互いにひた隠

し、白く塗られた墓と化すのはさびしい。

友よ、正しい教えを学び、進歩を信じ、

共に真理の道を歩み続けよう。アーメン。